

## (論文内容の要旨)

本論文の目的は、女学生という表象を通して、女学生文化の特質やその社会的意味を歴史社会的な視点から明らかにし、近代日本における「もうひとつの教養の系譜」を描き出すことにある。従来、女学校あるいは女学生に関する先行研究においては、良妻賢母思想の浸透の様相を活写する制度的あるいは思想史的研究、女子進学者の階層的背景や進路選択をデータ分析によって明らかにする社会的な研究、さらには近年の文学研究やメディア研究の成果に基づいて少女や女学生などのイメージやその主観的世界を描き出そうとする文化論的研究が行われてきた。

本論文の特徴は、人文・社会科学全般における「文化論的転回」に伴って重視されるようになった「表象」概念を方法論的な基軸に据えつつ、従来の研究方法・成果との結合をはかる複合的なアプローチをとることにある。ここでの「表象」とは、「記号や言語、イメージを用いて物事に意味を付与したり、あるいは他者に対して世界を意味あるものとして表現すること」であり、構築主義の立場から措定されている。このような方法をとることによって、女学生という表象が言説のなかでつくられていく過程やその背景にある教養や知の伝統との関係、またそうした言説を異化しつつ女学生自身が創り出していった独特の文化や「思い描く世界」までも射程にいれた考察を可能にしている。

とりわけ、本論文では家庭や職業と直結しない女学生文化が、モダンな教養と伝統的なたしなみ、さらにはメディアを介した大衆モダン文化を取り込みながら形成され維持されていった独特の文化であることを示すために、女学生たち自身の「思い描く世界」に寄り添って内側から再構成することに留意している。そのために、本論文では、女学生による「日記」や「手紙」類を丁寧に収集して、その表象の世界を開示している。

また、このような女学生文化は、「教養」と「軽薄な知」のなかでアンビヴァレントな表象であることを示すために、「文学少女」「不良少女」「ミッション女学生」に焦点を合わせた分析を試みている。その結果、「女学生」や「女学生文化」をめぐる言説には、「軽薄な知」の系譜と同時に、それを語る側の「教養」の系譜が映し出されており、女学生という「表象」を通して、日本の高学歴男子に準拠した「日本型」教養主義とそれを支える近代日本の西洋文化受容の特質を逆照射している。

本論文の構成は、以下のとおりである。まず序章では、女学生というテーマに対する問いとアプローチの方法について、「『女学生』という問題系」として論じている。それは、第1章から第5章までに展開される、女学生と女学生文化の実態と表象、その形成と変容の過程を描く水路を示すことでもある。

第1章では、女学生という表象のひとつの核である「文学少女」に焦点をあて、その実態と言説の両面から、その特徴と変化について論述している。とりわけ、女学生の読書の習慣やその中身についての各種調査を援用しながら、読書を通して形成されていった世界を「内側」から描き出すとともに、「文学少女」という表象の形成と変容の過程とその意味を明らかにしている。

第2章では、「文学少女」と関連した女学生文化の特徴のひとつである「手紙の文化」を軸にしながら、そのなかに現われる特有の友人関係や親密さについて考察している。女学生たちが交わす手紙の内容を分析していくなかで、手紙が媒介する友人関係やそこで共有されていく独特の感性や文化が、過去の甘美な思い出としてのノスタルジアとしてではなく、現在にまで維持される「思い出共同体」を構成するものであることを論じている。

第3章では、第1～第2章が女学生の中心的な表象を扱っているのに対して、それとは一見、逆のイメージを連想させる「墮落女学生」や「不良女学生」に焦点をあてている。ここでは、「墮落」や「不良」をめぐる言説の形成とその変容の過程を分析することによって、女学生のなかから排除されていった否定的な側面を特筆すると同時に、その変容と受容の過程に映し出される女学生へのアンビヴァレントな感情について分析・考察している。

第4章では、第1～第3章で述べてきた女学生あるいは女学生文化への肯定的・否定的な側面や、それへのアンビヴァレントな感情や態度をもっとも象徴的に映し出す存在であったともいえる「ミッション女学生」に焦点をあてて考察している。そのなかで、「ミッション女学生」という表象を通して、女学生や女学生文化に対する憧れと嫌悪の両面的な態度や感情が、近代日本における西洋文化受容や教養観をめぐる相克と重なり、それを反映したものであったことを論じている。

第1章から第4章まで、女学生という表象のもついくつかの側面について、その実態と言説の両面から分析・考察した上で、第5章では、それまでの各章での分析と知見を総合し、本論文全体の結論を展開している。女学生と女学生文化の形成と変容の過程を、近代日本における「教養」の系譜を照らし出す「軽薄な知」の系譜という角度から考察し直し、女学生という表象の意味を新しい角度から位置づけている。

## (論文審査の結果の要旨)

本論文では、構築主義によって規定された「表象」概念を方法論的な基軸にしつつ、歴史社会学的なパースペクティブから女学生文化の特質やその社会的意味を明らかにするとともに、近代日本における「もうひとつの教養の系譜」を描出しようとしたものである。本論文の学術的な意義については、以下のとおりである。

まず、本論文の第一の特質は、女学生文化の内実について、女学生自身の主観的世界に即して、その「思い描く世界」を再構成しようとした点にある。これまで女学校・女学生を対象とした研究は、視点や立場は異なるものの、いずれも女性のライフチャンスの拡大における教育機能の意義を前提とする場合が多い。しかし、それでは、職業達成や自立とは直接結びつかない独特の女学生文化の意味を積極的に位置づける視点が弱くなる。本論文は、表象という視点から、「解放／抑圧」の系ではなく、女学生自身の主観的世界（「思い描く世界」）をその内側から再構成することによって、その文化の意味を問い直したところに独自性がある。

本論文の第二の特質は、表象という視点から女学生あるいは女学生文化に対する言説を分析し、女学生文化へのまなざしとその社会的位置づけについて考察しているところにある。女学生という社会的イメージや注目のされかたは、女学校という制度や生活実態を超えた広がりを持ち、新聞や雑誌にも女学生を扱った記事や写真は数多く掲載されている。本論文では、これらの言説を緻密に分析していくことによって、「文学少女」「墮落女学生」「ミッション女学生」といったカテゴリーがいかなる社会的イメージとして形成され、そのイメージが表象するものは何だったのかを興味深く明示している。

本論文の第三の特質は、抽出された女学生文化の特徴が、伝統的な「たしなみ」文化やモダンな「教養文化」、さらに「大衆モダン文化」が重なり合った折衷的な文化であったことを析出したことである。このような幅広い領域にわたる女学生文化とそれを身につけた女学生は、モダンな教養と伝統的なたしなみの両方を兼ね備えた「教養ある女性」の象徴として一方では憧れと羨望の対象であったが、一方では「軽薄な知」の象徴として批判的なまなざしの対象でもあった。そこには女学生の実態である以上に、語る側の感情が映しだされていた。換言すれば、女学生や女学生文化をめぐる言説は、「軽薄な知」の系譜と同時に、それを語る側の「教養」の系譜を映し出してもいたのである。本論文の重要な点は、女学生という複合的な表象を通して、日本の高学歴男子を準拠とした「日本型」教養主義とそれを支える近代日本の西洋文化受容の特質を逆照射するものであったことを別掲したことである。女学生という表象を通して、「日本型」教養主義とは異なる「もうひとつの教養」の系譜をすくい上げた本論文の意義は大きい。

しかしながら、次のような課題があることが試問の中で明らかとなった。

まず、本論文の方法論である「表象」と、歴史的な「実態」との関係をめぐる課題である。本論文では、女学生あるいは女学生文化についての表象との関係から、当時の社会的背景や、読書傾向、趣味や稽古事にわたる回顧調査結果を分析し、女学生および女学生文化をトータルに描き出そうとしている。しかし、「表象」と「実態」の区別と関連、その相互作用や矛盾・葛藤についてはさらに精緻な分析が加わる必要がある。

次に、表象された女学生たちの主体的な営為に関わる課題である。当時のメディアによって作為された「表象」に対する抵抗の系譜や、または女学生の地位形成をめざす「実態」の解明などが進むことによって、女学生や女学生文化はよりトータルな像を結ぶことが可能となるだろう。

最後に、そもそも表象された「軽薄な知」としての女学生文化は、近現代の「教養」の系譜において、いかなる特質をもつものなのかについて考究する国際比較的課題である。それは、西洋化モデルによって裁断可能なものなのか、むしろ日本型女子学生文化の固有性に繋がるものなのかを他の東アジア諸国の女学生文化との比較を通じて明らかにすべきだろう。

このように本論文には今後の課題を残すものの、それらは本論文の学問的価値を否定するものではなく、本人もそれらの課題を自覚してさらに研究に邁進する決意を示している。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成21年9月24日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。